

自ら潤いをつくる

「まさきスタイル」

かつて松前の人々は、

氾濫や濁水などに悩まされてきた

そのたび、知恵と努力を結集し、

幾多の困難を乗り越えてきた

ここには古くから、

水と共に生きてきた歴史がある

水を生かしてきた風土がある

生きるために、潤うために、

一滴の水も無駄にしない暮らしこそ

まさきスタイル

豊かな水は豊かな心からつくられる

水が特産品

多くの人が豊かだという「松前の水」。そこにはどんな魅力があり、どんな可能性を秘めているのでしょうか。

松前町と言えば「水が豊か」だと言われます。特にここに暮らす人はそう感じているようで、平成22年に行われた「住環境に関する住民意識調査」では、「松前町の魅力を町外にアピールできる資源は？」の問いに、46.5パーセントの人が「豊かな水源」と答えました。松前の人々と水は、とても深く、強い関係にあり、水はまちの誇りなのです。

近年、日本人の「飲料水」に対する意識は高まっていて、生きるために飲むだけでなく、ダイエットやデトックス効果にまで期待を寄せています。日本人一人当たりのミネラルウォーター1使用量は10年前に比べ約3倍。内閣府の「水に関する世論調査」の飲み方を問う質問では、「浄水器を利用する」「市販のミネラルウォーターを利用する」と回答した人の割合が「水道水をそのまま飲用」する割合を上回っています。

井戸水を使用する家庭も多い松前町。あなたの家庭の「飲料水」事情はどうでしょう。

— 飲むより使う —
日常生活の中では、飲用よりも家事、洗濯、お風呂、掃除などに使う水が圧倒的に多く、約9割を占めます。ところが、「飲用水」のように気を遣っている人はそれほど多くないのが現状です。

水は「硬水」「軟水」に分けられます。硬水は、カルシウムイオン、マグネシウムイオンなどの硬度成分が多い水。反対に少ない水が軟水です。日本の水のほとんどは軟水で、ヨーロッパは硬水です。軟水は、飲み心地が柔らかいので消化機能が弱い赤ちゃんや高齢者に優しいなどの特徴があります。一方硬水は、石鹸の泡立ちが悪かったり、石鹸カスができやすかったりして肌の違和感や水回りの汚れにつながるなどの特徴があります。普段何気なく使っている水ですが、こうした水の違いは、国や地域の歴史や文化の成り立ちにまで密接に関わっています。

また、節水の工夫はどうでしょう。日常的にしていますか。かつて湯水の危機に直面した松山市では、節水のため食器洗い乾燥機の使用を推進していました。そういう節水方法もあるのです。当たり前に使っている「生活水」。意識を変えようと深く付き合えるかもしれません。

松前町の魅力を町外にアピールできる資源「水」。
全ての人の暮らしと密接に関わっている「水」。
身近な水についてあらためて聞きました。

町民の皆さん、 「松前の水をどう思いますか？」



↑ 弓立輝男さん 眞里子さん
徳丸



← 鎌倉雅之さん 福岡賢一さん
金野佑樹さん 穂積くん
山本仁さん 谷岡達也さん
神崎・鶴吉

↓ 沖亜矢さん 陽菜ちゃん
南黒田



↑ 関谷奈菜さん 莉里ちゃん
恵久美



→ 濱村志津子さん 亜実ちゃん
宗意原



↓ 大政トシエさん
中川原



↓ 宮田幸さん 蒼空くん 愛咲ちゃん
筒井



← 浅山優太さん 山口賢人さん
岡本龍輝さん 細川恭耶さん
川井和也さん 川本藍良さん
三好翔大さん
松前中3年



↑ 星川廉さん 堀部万聖さん
木村祐世さん 鎌田一慶さん
大西洋志さん 藤野祐史さん
篠原利輝さん
松前中3年・2年

← 郷田龍輝くん 三好匠人くん
大間

ライフラインという責任

「松前の水をどう思いますか？」の問いに「浄水器要らず」「安いし、きれいし、安全だし、大満足」「おいしい」という声がありました。

私たちは松前の蛇口から出る水を信頼し、期待しています。ここでは、松前町の水道を紹介します。



主婦
石井裕子さん
(北黒田)
Ishii Yuko

4年前まで町外に住んでいました。松前に来て、水道水のおいしさにびっくり。それまでは、塩素臭さが気になって水道水をそのまま飲むことは絶対なく、沸かして飲むかミネラルウォーターを買っていました。それに比べて松前の水は、臭みがないのでそのまま飲んでます。子どもにも安心して飲ませることができるのでうれしいです。



町上下水道課
近藤俊彦 課長補佐
Kondo Toshihiko

「蛇口をひねれば安全な水が出る」。当たり前のようにですが、これを維持するのは容易ではありません。上下水道課では毎日、全ての水源地を見回り、水質や水量を調べています。さらに月1回、蛇口の水を取り出して詳しく検査しています。「水が出ない」「濁っている」などと連絡があれば、24時間対応します。これからも、水道水を常時安全に供給できるよう努めていきます。

水なしでは5日も生きられない

人間の体はおよそ60パーセントが水分です。人間は、水と睡眠さえしつかりとつていれば、食べものがなくても2〜3週間は生きられると言われています。しかし、水を一滴も取らなければ、4〜5日で命を落とすてしまうこともあります。

全国的にミネラルウォーターを買う人が増えていますが、松前町民の多くは水道水をそのまま飲用しています。松前の水道水は、生きるために欠かせない命の源。文明が発達した現代では、文化的な生活を営むためにも多くの水を必要とし、その量は生命を維持するための水量をはるかに上回ります。こうした水を、みんなが安心して使用できるように、安定的に届けているのが「水道」です。

水道の誕生

水道ができるまでは、つるべと井戸や手押しポンプ井戸を利用していました。昭和26年、松前町に簡易水道が誕生。創設時の給水人口は1万1千人、1日最大給水量は1650m³で

大渴水でも断水を回避

町全体が、この伏流水の恩恵を再認識させられる出来事がありました。平成6年の大渴水です。7月の雨量は20・5ミリ、8月は12ミリ、9月になると水源地の水位は日増しに下がり、取水できなくなる水源地も。「このまま雨が降らなければ枯渴してしまう」と、断水を心配する日々が続きました。町は、水量を確保するため、他の水源地から給水するなどして、最悪の断水を免れました。

松山市や伊予市では時間給水を行いました。松前町は、7時間給水が続く伊予市の非常事態を受け、飲料水の救援を決定。水量に余裕のあった西古泉水源地から地下水をくみ上げ、自衛隊のトラックで1日150トンもの水を伊予市に届けました。

断水を切り抜け、救援水を送ることができたのは、重信川が育んだ、良質で豊富な地下水のおかげなのです。

環境の変化や災害に対応

地下水に頼っていた松前町の

した。しかし、人口が増え、水道を使う人が増えると、規模の大きい水道が必要になりました。そこで、上水道が造られ、水道管と水道管をつなぐ工事が進みました。昭和41年、南黒田・北黒田・塩屋地区の施設を一つの施設につなぐ工事が完了（西古泉水源地）。以来4回の拡張事業を行いました。現在の給水人口3万524人、1日最大給水量1万1430m³です。

100%地下水

松前町の水道水をおいしいと感じたり、おいしいという声を聞いたりしたことはありませんか。松前町の水道は、全て地下水を利用しています。水源は一級河川重信川の伏流水。町内8カ所の井戸からくみ上げています。

都市部では、河川から取水した水に大量の薬品を投入し、処理を重ねて飲料水を作っているところもあります。重信川の伏流水に恵まれた松前町は、不純物が自然のろ過作用で取り除かれるため、ミネラル成分を適度に含むおいしい水を提供できるのです。

水道水は、定期的な水質検査と必要最小限の塩素消毒（滅菌処理）をするだけで十分でした。しかし、近年、全国的には環境の変化によって塩素消毒では死滅しない原虫が水道水を汚染するという事例も報告されています。また、近い将来発生が予測されている東南海・南海地震にも対応した水道施設の整備が強く求められています。

そこで町は、平成14年度に第6次拡張事業計画を策定。町内を恵久美・徳丸・西古泉の3ブロックに分け、安全でおいしい水を安定的に届けられるよう、段階的な整備を進めてきました。

平成19年に完成した恵久美浄水場、現在建設中の北伊予浄水場は共に、塩素消毒では死滅しない原虫まで除去できる最新の「膜ろ過」方式を採用。水をためる「配水池」には、地震などによる断水を低減する緊急遮断弁を設置。恵久美浄水場は、2465トンの飲料水を蓄える能力があり、災害時には当該エリアで約2週間の応急給水が可能です。3ブロック全てが完成すれば、町全体で約3週間の応急給水が可能になります。

先人が生み出した偉大なシステム

「農業にかかせない大切な水」という農家の声がありました。人間に水が欠かせないように、農業にも水が欠かせません。作物を作ったり、家畜を育てたりする「農業用水」です。水が産業にどのように使われ、役に立っているのかを見てみます。



徳丸地区で米、ナス、白ネギを栽培する渡部幸男さん。「ナスやネギに比べ、米は水さえあればほっといてもできる」と笑顔で話します。とはいえ、稲作は水を入れたり、控えたりを繰り返す水管理が重要。水稲10アール当たり15000トンもの水が必要です。

渡部さんは「今となっては農業用水はあって当たり前。昔は水の確保に苦労したんです。地区の男たちが総出で、鍬で掘り、重信川から水を引いてね。大雨が降ると洪水でつぶれて、また掘るの繰り返し。これではいかんと、コンクリートの管を渡して水を取るようになったのは昭和3年のことです」

日本の水田は先祖が長年かけて生み出した偉大なシステム。先人の汗がしみこんだ肥沃な土地には人々の心が宿り、協調性や団結心が息づいています。

農家集落は、昔から水を大切にし、管理は地区の共同責任で行ってきました。大川はもちろん、小川や井出（用水路）など、すみずみまで整備されていることが望まれ、今なお「井出掃除」と呼ばれる地区全員による清掃が続けられています。「機械化が進み、田んぼを耕すのは一人でもできるよ



農家 渡部幸男さん (徳丸) Watanabe Yukio 農業に欠かせない水の確保は、一人じゃできん。徳丸

丸は特に水の確保に苦労してきた。だから何をやるというても昔からまともだと思ってる。

「人類の歴史は、水との戦いだった」といえるほど、水をいかに上手く利用するかは昔から大きな課題でした。そのため、古くからたくさんの治水・利水のアイデアが生まれ、洪水を避けたり、農業ができたたりしたのです。

昔の伊予川

その昔、松前にはたびたび洪水を起こし人々を苦しめてきた川がありました。重信川です。

重信川は昔、伊予川と呼ばれていました。今から400年ほど前、正木城（松前城）の南には、城を攻めてくる敵から守るために伊予川が流れていました。しかし、戦が



足立重信 生年不詳 - 寛永2(1625)年

松山・加藤家の重臣。美濃国（現岐阜県）から来た。年少の頃から加藤嘉明に仕え、文禄4(1595)年、嘉明とともに正木城に移る。特に土木治水事業に精通し、伊予川（現重信川、足立重信の名にちなむ）や石手川の改修などを指揮した



今でもコンクリートで「鎌出し」をつくり、堤防を守っている（徳丸付近）

なくなると、大雨のたびに川の水があふれ、泥沼になってしまいました。

そこで城主・加藤嘉明は、家臣の足立重信に伊予川の改修を命じました。

足立重信の工事

重信は、正木から横河原まで何度も歩いて調査しました。そして、内川の下流の川幅を広くして、伊予川を正木城の北へ流すことを考えついたのです。今の松山市森松から海に流れるまでの8キロに、新しい川を造るといふものでした。

1597年に工事を開始。機械やコンクリートのない時代に、8キロもの長さの川を掘り、3

メートルもの高さの堤防を造ることは、大変な作業でした。

洪水を防ぐ方法

水の流れが強いところでは、せつかく造った堤防が壊される心配があるため、重信は「鎌出し」という方法で水の勢いを弱めることにしました。川の両岸から直角に岩を組み、水の流れを川の真ん中へ追いやり、堤防に当たる水の衝撃を低減したのです。

また、わざと堤防を切っておき、大水が出たときは、湿地などの作物を作らない低地に水を流し、ためられるようにもしました。そこから水が外へ流れ出ないようにも

暴れ川を恵みの川に変えた水の匠足立重信

松前町に豊かな伏流水をもたらし、町民の生活を、町の農業を支えている重信川。かつて伊予川と呼ばれ、豪雨のために氾濫を繰り返す「暴れ川」だった一。

う一つ堤防を造りました。これを「霞堤」といいます。今でも重信川には9カ所の霞堤があり、洪水を防ぐ役割を果たしています。

工事の結果

伊予川の付け替えで、湿地、石や砂の多い荒廃地も、耕作地になりました。松前だけでも100ヘクタール、伊予川が流れる全ての地域を合わせると、5000ヘクタールもの田が水利の恩恵を受けるようになったのです。人々は足立重信をたたえ「伊予川」を「重信川」と呼ぶようになりまし

た。重信の工事の後、洪水はたびたび起きました。その都度、それぞれの時代に生きた人々が、英知を集め、洪水を防ぐ工夫と努力をしてきました。

先人の知恵と努力の結晶で今に至る重信川。今後も恵みの水を運び続けます。

まちなかの ホス。ピタリティー

「ひよこたん池公園は庭のような憩いの場所」という声がありました。水辺空間は、日常を松前で過ごす人にとっては憩いの場であり、松前に帰る人、松前を訪れる人にとっては癒しの場です。私たちのまちの水辺空間には、ホスピタリティー（おもてなし）が漂います。



ひよこたん池公園

お盆や祭りには、家族で帰省するという中川原出身の多賀透さん（松山市）。「小さい頃はひよこたん泉や権助泉で友達と泳ぎました。泉に行けばみんなに会えた。泉には忘れられない思い出がいっぱいです」と懐かしそうに話します。

友達と歓声をあげてはしゃいだ水遊び、小川での魚とりなど、水辺にはさまざまな楽しい出来事があります。その情景は時折、故郷の思い出として蘇ることでしょう。水辺は、私たちの心に感動や郷愁を与えてくれるのです。

そんな水辺には、町内出身でなくとも、大勢の人が訪れています。憩えたり、遊べたり、水辺空間が今でも日常生活の中にある松前町。松前の人たちにとって生活の場である水辺は、松前を訪れる人にとって非日常空間。豊かな水辺空間で過ごすことは、心身の癒しにつながるのです。さらに、恵まれた自然が育んだ松前の人情は、訪れた人の心を癒す一番のサービスです。

松前の水辺空間には、里帰りした家族を迎えるような「ホスピタリティー」が漂います。

ふるさとの記憶として残る



松前公園子ども広場



中川原出身
多賀 透さん（松山市）
Taga Toru

小さい頃、ひよこたん池で泳いだり、川で魚をとったりしていました。権助泉でもよく遊びました。水が冷たすぎて5分と泳いでいられなかったぐらい気持ちよかったです。そこは3～4メートルの深さがあって、飛び込むのが一番の楽しみでした。みんなの遊び場であり、交流の場でした。当時の仲間とは、今でも帰省するたびに会って、思い出話をしています。



大間の有明公園。盆には伝統行事として、川に浮かべた麦わらに火をつけ、祖霊を迎える迎え火、送り火が行われる

見る人に潤いとやすらぎをくれる

重信川をはじめ、国近川、大井手川など多くの河川が流れ、水辺空間に恵まれた松前町。これらの水は、古くから生活用水、農業用水、工業用水として人々の暮らしを支え、松前町の歴史を築いてきました。

近年、全国各地で、流れの途絶えた水路などに清流を復活させたり、人工のせせらぎを作ったりすることで、潤い、安らぎ、憩い、遊びの空間が作られています。これは生活環境へのニーズが高まって、水に親しむ（親水）観点から、河川や水路などの水辺空間が重要視されているからです。

松前町でも、この豊かな水辺空間を安全に利用できる親水公園を整備しています。

自然湧水を生かした中川原地区の「ひよこたん池公園」、大間地区を流れる国近川沿いの「有明公園」、神崎・鶴吉地区の「福徳泉公園」などの親水公園は、やすらぎや憩いの場となっており、多くの町民に潤いをもたらしています。

「生きるために」はもちろん、暮らしに潤いをもたらす水は、私たちにとって、まちにとって、大切な「宝」です。

一人一人が「水スタイリスト」

これまで見てきたように、松前の水環境はとても恵まれています。一方で、忘れてはいないでしょうか。水は私たちだけのものではないこと、限りなくあるものではないことを。次の3人は、それぞれの体験から感じ、行動している、言わば「水スタイリスト」です。今日からあなたも、あなた流の水スタイリストです。

昔に比べると明らかに水辺の生き物は減っている。水辺と私たちの密着度を高めれば変化に敏感になれる。



町内の自然観察会で講師を務めた農学博士 矢野 和之さん（滋賀県在住）

小学生の頃は松山に住んでいました。松山にはタナゴがいなかったので、わざわざ松前町のひよこたん泉や国近川へ採りに行きました。他にも、ナマズ、オイカワ、カマツカなどがたくさんいました。そんな松前町でも、昔に比べると明らかに水辺の生き物は減っています。ひよこたん泉は公園としてきれいに整備されました。河川や排水路は護岸整備され、植物や河床の土が取り払われました。畦や水路はどこもコンクリート張りになり、水田と排水路の落差は大きくなりました。ホタルやカエルなど水陸両方で生活する種は、水陸間の移行帯(エコトーン)が重要です。さまざまな植物が生え、外敵から身を守るのに好都合でした。泉周辺には今も植物が生えていますが、そのほとんどが外来種。動物もそう。ミドリガメやジャンボタニシなど、水辺の生態系は外来種に乗っ取られつつあります。フナやメダカなどの魚類は、田植えとともに水田内まで遡上して産卵します。成長した稚魚は落水とともに排水路へ戻るのですが、水田と排水路の落差拡大で産卵期に親魚が遡上できなくなっています。こうしたさまざまな要因によって水辺の環境は変化し、生態系に大きな影響を与えています。いずれの要因も人間の生活様式の変化や利便性の追求が根底にあることを忘れてはいけません。

皆さんはきれいに整備された今のひよこたん泉などを見てどう思いますか？ 私はいいなと思う反面、違和感も感じます。人にとっては便利で安心できる場所かもしれませんが、生物にとっては決して住みやすい環境ではないと思うのです。だから前述のような問題が起こっている。でも悲観しないでください。町内で姿を消したと思われるトノサマガエルのような種もいますが、タナゴ、シマドジョウ、ナマズなどの魚類、カエルやトンボなどまだまだ多くの種が生息しています。今残っている生き物たちは松前町の財産です。その財産を未来につなぐため、残っている生態系を保全し少しずつ回復させていくことが重要です。保全というのは貴重だから立ち入り禁止にすることではありません。むしろどろんどろん水の中に入って魚やトンボを捕まえてください。水辺と私たちの生活の密着度が高いほど、水や水辺の環境の変化に敏感になれるはずですよ。

私は4月から滋賀県に住んでいます。滋賀県では排水路を嵩上げし、水田で産卵する魚類が遡上できるようにする「魚のゆりかご水田プロジェクト」が行われています。農家にしたら生産プラスαの労働だし、農業や肥料の使用にも気を使うので管理に手間がかかります。しかし、生産されたお米は魚が育つ水田でとれた安心できるお米として付加価値がつくのです。

松前町の水辺環境を守るためには、町民一人一人の意識が重要です。いつも美しい水辺環境が日常の中にある。それが理想ではないでしょうか。



水は私たちだけのものではありません。それは、町民だけのものではないし、日本人だけのものでも、人間だけのものでもないということですよ。水は、地球のあらゆる生物が生きていくために、なくてはならないものです。水が利用不可能になるということは死を意味します。

世界ではおよそ11億人が、安全な飲み水が手に入らない地域で暮らしています。そのため、幼い子どもたちが次々に病気になるっています。こうした国に上下水道や衛生設備を整備することは、日本も協力していますし、企業が先進的な水道サービスを提供する動きもあります。

停電と断水が日常茶飯事のジンバブエ。大切な水、流しっぱなしなんて今は怖くてできない。

私は青年海外協力隊員としてアフリカのジンバブエとウガンダで活動しました。ジンバブエもウガンダも、水道と電気が整備されていましたが、実情はとんでもない状況でした。

ジンバブエでは、停電と断水が日常的に起こりました。停電は何かやりくりしましたが、断水は大変でした。数時間の断水なら水が出る時間に料理、洗濯、洗顔、水浴びなどを済ませることができず、何日も続くのです。日常生活はもとより、衛生上の問題も出てきます。水道の蛇口はあるのに、ひねると無情にも「キュッ、キュッ」と虚しい音が響くだけ。

私は器、ペットボトル、バケツといった容器に水が出る時に満杯に貯め、雨水さえも利用しました。激しいスコールのときは、あらゆる容器に水はすぐ一杯にたまるし、身一つで外に出れば天然シャワーです。そういう生活を送る中で、日常生活での水の消費量がとても多いことに気がきました。

ウガンダでも、ライフラインに影響を与える程ではありませんでしたが、停電と断水はしょっちゅうでした。ジンバブエでの生活を経験したおかげで、一日くらの断水は気になりませんでした。

青年海外協力隊の経験から何か変化したことはありますか？ とよく聞かれます。一番の行動の変化は、水を大切に使うようになったことです。手洗い、歯磨き、食器洗いをする時は、以前は蛇口をひねったまま水を流しっぱなしにしていたが、今は怖くてできません。こうした行動は最低限の水圧で事足りることが分かったので実践しています。お風呂の残り湯も洗濯、掃除に使って有効利用しています。

傍からみるとセコイと思われるかもしれませんが、身に付いたこの習慣を誇りに思います。



聖学校の生徒が数少ない水道から水を確保（ジンバブエ）

林 謙太郎さん（松前病院勤務）
青年海外協力隊で言語聴覚士としてアフリカへ

「水はかぎられたもの」なんて感じたことはなかった。一滴の水も大切に「日本丸家族」にしたい。

日本丸を一目見ようと南予ヘドライブに出かけた。私は、航海士さんに質問した。「航海する上で最も大切なことは何ですか？」「見はりや水です。」「何か月も航海する上で大量に必要な水はどうしてるんですか？」「船にあるタンクに水を入れていて、少なくなると寄港して水を補充しています」

「かぎられた水で過ごすなんて大変ですよ。もちろんむだ使いなんて出来ないし毎日が戦いですね」

航海士さんは笑顔で答えてくれた。しかし、その内容は理解しがたいものだった。私の住む松前町は地下水が豊富なため、「水はかぎられたもの」なんて一度も感じたことはない。はられている「節水」のシールも大切なものだと意識したことはない。シャワーでお湯を出しっぱなし。手を洗う時も、うがいをする時も…。船上の生活で食べ物がなくなったら魚などで代用できる。しかし、飲料水は海水でも雨水でも代用できない。だから水をむだ使した人はヤシの実を使った甲板そうじの罰がかせられるそうだ。一日一日が水との戦い。航海士さんとの会話で知った事実を通し、一滴でも貴重な水を無駄にはできないと強く感じられた。



そんな水のありがたさについて家族で話していると、母と祖母が話をしてくれた。私が生まれる前にすごいかっ水の時があったそうだ。水を使える時間が限られているため、トイレは流せずお風呂にも入れない。給食はパンと牛乳のみだったそうだ。私は思わず息をのんでしまった。

「水のありがたさ」「水の貴重さ」「水の大切さ」を知り、今までむだ使いしてきた水を取り返すぐらいの気持ちで節水に取り組みなべと感じた。例えば、シャワーの一回十秒ルールや顔を洗う水は洗面器にくむ。妹や弟にも私が感じたことを話し、意識あって節水を心がけていきたい。まず、今から「水を大切に」のポスターを蛇口の横にはろう。そして月に何回か家族で水の使い方について見直し、話し合おう。「一滴の水も大切に」をモットーにこの家を船だと思い、限られた貴重な水を大切に使う「日本丸家族」にしていきたい。

平成24年度「全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会」奨励賞 渡邊 りおさん（岡田中学校1年）

これから生まれてくるものたちのために、私たちは水の使い方を考えなければなりません。矢野さんは、生物から水との関わり方を考えました。林さんは、海外での生活から行動を見直しました。渡邊さんも、日本丸からこれまでの考え方の違いに気付き、意識を変えました。三者三様の水スタイリスト。あなたはあなた流の水スタイリストになれるはずですよ。

水から学び、 自らつくる新しい流れ

時の流れを映してきた重信川。住む人々に自然の偉大さと優しさを教えてくれました。命や文化を育み、まちの発展を支えてくれました。その流れは松前の歴史にも似て、今も滔々（たうたう）と流れます。

松前町は水に恵まれています。しかし、世界に目を向けると、深刻な水不足が懸念されています。

松前町において、水は広く利用され、潤いとやすらぎを与えてくれる存在として、守り親しまれてきました。松前町には、水と共に生きてきた歴史があります。これからもずっとそうでありたいと願ってやみません。

限りある資源を絶やすことなく使い続けていくには、私たちの今の取り組みから始まります。

方法はたくさんあります。まずは、「湯水のごとく使う」習慣を改めて、ほんの少しでも水を大切にすることが、ここから始めましょう。決して難しいことはありません。

節水とは、水を大切に、していいねいに暮らすこと。暮らしを豊かにすることです。

このまちに暮らす私たちだからこそ、しっかりと「水」の価値を知り、水を誇りに思い、大切にしていきたいと思います。

それこそが、暮らしにさらに潤いをもたらす「まさきスタイル」。

重信がつくった流れをベースに、もっと豊かな流れをつくるのは私たち自身。明日の当たり前は、今日の行動によって守られるのです。